

高機能広汎性発達障害児における自己認知

—あるアスペルガー症候群児との面接を通して—

下園 彩華¹・吉田 ゆり²
（¹鹿児島市精神保健福祉交流センター・²長崎大学）

【問題・目的】 高機能広汎性発達障害（以下 HFPDD）者に関する多くの研究では、心の理論や他者の気持ちの理解の困難に関する研究に焦点があてられてきた。一方で、他者を捉える際に必要となる自己理解や自己認知等、自己の特異な捉え方に着目した研究は散見される程度である。通常発達児の自己に焦点を当てた研究として、佐久間・遠藤・無藤（2000）は新たな自己描出内容分類カテゴリーを作成している。しかし、傷つきやすさ(安井, 2003)や自尊感情の低さ(一門ら, 2008)を持つとされる HFPDD 者に対して、このような定型発達児者の自己理解発達の方略と同様に見ることの問題は依然残されたままである。そこで本研究では、第一研究として、佐久間ら(2000)を用いて HFPDD 児特有の特異な自己認知のあり方を探るとともに、先行研究で明らかにされている定型発達児の児童期から青年期にかけての自己認知と比較検討することを目的とする。

【方法】 幼少期から、本人または学校等への支援がされてきたことが明らかであり、その後の支援体制も整っている研究協力者への面接を行った。

調査対象 **研究協力者** アスペルガー症候群の診断を受けた中学生男子 1 名。

面接実施の際の手続き 半構造化面接。質問項目は、佐久間ら(2000)に拠った分析の枠組、①自分の好きなところ、②自分の嫌いなところ、③自分のいいところ、④自分の悪いところ、⑤自分をどんな子どもだと思うか、⑥どんな子どもになりたいかというものであった。また、質問項目以外に、研究協力者が自由に語ることで面接を進めた。分析方法は質的コーディングを行い、逐語文字化したものを佐久間ら(2000)の分析枠組みに新たな下位項目を作成し行った。

【結果と考察】 まず人格特性に関する語りが多岐に渡っていたことや、注意関心の項目が核となっていること、定型発達児と同様に他者に対するエピソードも見られたことが明らかとなった。さらに、定型発達児との重なりは Harter(2006)における児童期後半との重なりであり、青年期前半には達していない結果となったことも特徴的な結果であった。そして、自己表象・自己評価については、幼児期に見られるような自己の様相を呈しており、発達のなゆがみが確認された。これらの結果は、HFPDD 児が定型発達児と同様の自己認知の様相を見せるが、その内容において極端に注意関心によったものや、より有能感大きいことなど、特異なものであることが明らかとなった。また、行動や人格特性の中で、障害特性に挙げられている協調性についての結果を以下の表に示した。

表1 自己認知分類カテゴリー（下園（2010）より引用）			
行動	協調的行動	下位分類不能	「漫画のタイトル」読んでないのが私だけ
		他者からの評価	クラスみんなに変な子と言われる
		特性	人を見て自分も行動するから遅い
表2 自己認知分類カテゴリー（下園（2010）より引用）			
人格特性	協調性	下位分類不能	レディーには優しくしないと
		他者からの評価	自己中とか言われる、先輩に気に入られる
		有能感	人気者
		保守的な意味づけ	ネガティブに生きているほうがからまれずに生きていける
		他者懸念	自分はずれている、いつも自分の話しをして他の人を振り回す
		協調的願望	なじみやすい人になりたい、優しくて親しみやすい人になりたい